

翻刻

絵巻「郊遊会図」および「隅田の家つと」

高槻 幸枝・氣多 恵子

本稿で紹介するお茶の水女子大学附属図書館所蔵の二軸の絵巻は、女子高等師範学校（以下女高師とする）の行事の様子を、当時の教授が描いたものである。

「郊遊会図」は、明治二十七年五月におこなわれたお茶の水から目黒までの遠足（郊遊会（一））の絵巻とされ、女高師教授であり画家でもあった荒木寛畝（二）が絵を、同じく教授で歌人、国文学者であった小中村義象（三）が詞書を担当している。女高師校門前から始まり、増上寺、目黒不動、祐天寺、愛宕山、恵比寿麦酒製造会社など立ち寄り先での一行の様子が描かれた絵には、各場面での出来事を描写した詞書が添えられている。なお、この絵巻には原題簽が欠けており、「郊遊会図」という表題は、お茶の水女子大学資料委員会によるものである。

「隅田の家つと（四）」では、同年七月に学校職員の親睦会としておこなわれた、夜の舟遊びの様子が主題となっており、二艘の舟で神田川を出発し隅田川へ出て、吾妻橋、言問の辺りまで川を上り、また女高師付近まで戻ってくる間の、舟の中での宴の様子や川沿いの夜の景色が描かれている。これは、女高師教授であった武村耕靄（五）の絵に、「郊遊会図」と同じく小中村義象が詞書をつけたものである。

これらの絵巻は、お茶の水女子大学の歴史を知るための貴重な資料であるとともに、教育史研究や観光研究（六）等の分野においても有用なものである。現在、附属図書館のホームページ内「創立120周年記念展示オンライン展示」（七）で冒頭部分が、また『お茶の水女子大学百年史』（八）で本文の一部が紹介されているが、絵巻全体の翻刻

は今までなされていなかった。

それぞれの書誌は次のとおりである。

「郊遊会図」絵巻一軸。改装。天地二七cm。見返し部分二五cm。表紙を除いた本紙の長さは八八七cm。画図一二面。淡彩色。原題簽欠。すべての絵に「寛畝」、巻末の署名の後に「義象」の印記あり。

「隅田の家つと」絵巻一軸。改装。天地二七cm。見返し部分二二cm。表紙を除いた本紙の長さは五四六cm。画図八面。淡彩色。原題簽は縦一四cm、横二cmで「隅田乃家徒登」と墨書。第8図に「武邨千佐」、「耕靄□□」（□は解読できなかった文字）の印記あり。

翻刻にあたっては原文を忠実に翻字するよう努めたが、読解の便を考慮して濁点・振り仮名を振り、適宜、句読点を付け加えた。本文中の漢字は新字体に統一し、必要に応じて（ ）を付して送り仮名を補った。「ゝ」「く」のおどり字はくり返すべき文字に置き換えた。絵は、その位置をへ郊・絵1へまたはへ隅・絵1へのように示し、末尾に一括して掲げた。なお、本文中の一行分の空白は、絵の前後の改行を除き、絵巻の詞書の段落に準じている。

「郊遊会図」

露のひぬまにと起きいでて、わが校の門にあつまれる人は、男女そのかず百人にやあまりぬらむ。けふは目黒の祐天寺にあそびて、日頃の労きをなぐさめむあらまし也。かねて五組六組にわかちて、おの志さむかたをたどりて行くべき契りなりければ、あるは躑躅に、あるは牡丹になど、心こらしぬるもをかし。いでや日ごろは学びの道を

のみたどりて、物いふもいかめしきさましたる人々も、けふはかたみに打とけて、ここよらむかしこにやよらむなど、いひしろふもうれし。女どちの髪を一つもとどりに束ねたるは、今やうをおふともあらず。きらびやかなる衣とりよそふものなきは、もとよりさる境にこころをとどめねばなり。

〈郊・絵1〉

御茶の水橋を南にわたるものは、芝高輪わたりに心あるものなるべし。小石川四谷をさして行くものは、目白大久保などにころひかるるならむ。いづれも午の時には祐天寺にものすべきぎりなれば、ころあわただしからぬはなし。

忠臣蔵といへば誰もしらぬものなきは、この人たちの義にいさみたるが、おのづからわが国人のころにかよへればなるべし。石塔は苔むして文字の見えぬもあるを、涙ながらにかきむしりてよむもあはれ也。ある人、

高輪の丘はるすぎて 青葉をぐらき泉岳寺 そとばこけむし石もの
ふれど 埋れぬ名はよろづ代に
など、今やうぶりうたふ。

〈郊・絵2〉

遺物ども陳列せるを見るに、その折に用ゐし太刀かたなどもあり。大石氏父子のかけるもの首請取状切腹のえまきなど見るこそ、いとあはれにはおもひやられしか。

江戸紫の色しかりしむかしは、いかにこの寺の天が下にはきらめきけむ。今は松の木蔭に五重塔の心ぼそくたてるにも、世の変遷はしらぬべし。さはれ朱塗の大門には古の名残しのばれ、世々の將軍の廟には、いかでくりかへしそのかみをおもひ出でざらむや。法師の案内にておくつきども拝みありく中に、静寛院（九）もおはしますぞかし

こき。

〈郊・絵3〉

ここは御三家ならでは許されざりし間なり、かしこそ万石以上の大名の扣へどころにはありけれ、などかたるもなつかし。文昭公（二〇）の廟は日光なる東照宮の廟にもまして磨きなせりとかねてきき侍りしに、げに心よせらるるかたみ候。さはいへ今はかかるころも金若干出せば、誰人にも見（せ）しむるやうになりしは、紫の色のいかにあせ行く世と案内の法師の鼻うごめかすにつけても、打おもはるるよ。

あつしとはあらねど、ながき道に足つかれてあえぎあえぎくれば、杉の森はるかに見ゆ。うれしさは飛立ばかりなれども、さいはむも足よわきやうなれば、忍びてゆく。やうやう近（つ）けば大門あり。仁王の拳も世ばなれて、いと仏さびたり。明顕山祐天寺といへる額も見ゆ。たださへをぐらき森なるを、青葉のさしいづるころなれば、郭公の宿りはここならむとは誰もおもひよるべし。

〈郊・絵4〉

いつもながら怒りたまへるかほつきいとかしこきにも、猶女小どものよりくるこの不動堂こそあやしけれ。さるはいみじき利益おはすものをなどいふは、この道にころえふかき人なめり。音にたかき独鈷の滝は仁王門の左のかたにありて、竜の口よりおちくるもめづらし。ここに水あみて願たつれば、何事もかなふといへば、試験の事もさあらばと立よるは、けふのあそびにもなほ学びのことをおもひわすれぬなりけり。

〈郊・絵5〉

大かたつかれたれば、茶屋にいこひて水こひ、茶のむ。鷹居松比翼塚などたづぬる人は、いとすくなきなるべし。

ここは大久保の里なり。つつじは今をさかりに、赤きはもえいつるやうに、白きは時ならぬ雪などのごとく、あるはこがねに見ゆるもあれば、その葉のみどりなるにてりあひてながめますもあり。五色にたらはぬをかこつ人あれば、そのしろくさける一ふさまるらせよ、と園守にものいふもあり。

〈郊・絵6〉

茶めし候へ酒も候、といふにふりかへり見るは男どちなるべし。

祐天寺を去ること三町ばかりなるところに鬼子母神の社あり。名にたかき仙台の浅岡(一)がはかはここにありときけば、皆人々まうづ。本堂の右なるほそみちをたどりゆけば、石の玉垣しわたしたり。見るよりはやうそのかみの事打しのばれて、かの千年万年などうたふ(二)浄瑠璃の声も耳にのこれるこちす。血になくほとぎすもなきにしもあらず。かれこれたへがたければ、たづねきてむかししのべば

〈郊・絵7〉

ふく風の夏も身にしむところなりけり

この寺にさまざまの宝物あり。仏像画卷など、打かたぶかるものなきにもあらざりしかども、猶いかにぞや、法師らはわれらの至れるをまちて、里の名物とて筍飯といふものもてなす。汁あり香のものあり、飢ゑたるにはあらねど、とくより起きいでてありきこしかば、ほとほと眼くぼむ、などはたはぶれつつ、ひた食ひにくふ。五椀六椀をへて後ぞ、今すこし味よく炊きたらましかばなどいふもをかし。かかるとは女たちの耳には入らずやありけむ。

〈郊・絵8〉

今は天が下にもてはやさぬものもなき甘藷といふものは、東国にて

は青木翁の植ゑしよりおこれり。この翁のはか、目黒不動にゆく道にあれば、つねにこれを嗜むもの、いかでかただに見すごさむ。

〈郊・絵9〉

おもひおもひにつづら道をはひ上りてその墓前にぬかづくは、報本反始(一三)の札をつくせるか。あはれ今よりのち、このものくふごに必ずおもひいづるは、この翁のはかならむかし。

行人権之助などいふ、あやしき名おへる坂を上り下りするわたりに、眼鏡のかたちせるはしあり。ところのものは、大鼓橋ともいふなる。こは、もとさつまの人なにがしとかやいふもののかけしより、さるものに見えたり。都の万代橋は朝夕目なれたればさもおもはねど、この橋のかかる小川にしもかかれるが、いとあやしければ、人々みなめづらしといふ。さて傘もてたくもあり、足に力入れて踏みならしつづわたるもあるは、この大鼓といふ名に心ひかるるにやあらむ。

〈郊・絵10〉

目黒の停車場よりやや遠ざかるところに、煉瓦造りのいかめしきは、名にたかき恵比寿麦酒製造会社なり。けふのつれにはここに因ふかき人あるまに、だれもだれもおしよす。大なる機械ども、あるは水をこし火をふきつきしめきあへるさま、いとめづらし。この釜はしかじかの用ぞ、かの車はかくかくと、こまやかにいひとく人あれど、あまたの

〈郊・絵11〉

耳には入らざるもあるべし。ともかくも一つきころみ候へといはるるに、はやう樽のもとに立よりたるは男どちの髯多きものにして、この氷めせといふに走りよるは女どちなるべし。

愛宕山はもと火神をまつれるも、今は大かたの人はただ天狗など

のやうにいひののしるこそうたてけれ。ここは都にてもいと高台なれば、あまたの薨は足の下に見え、品川の海はるばると波たてるさまさへ眼の中に入りてすずし。このごろは愛宕館といふものを築きたてたれば、そのけしき一しほなり。そもそも世に鼻のたかきをよるこぶはいかなる事ぞやと一人がいへば、其は此神にちなみたるなり、奥に鼻ありなどいはるきは誰もこのまざることならずやとあらがふをまたかたはらよいいな鼻たかくては物くふにも書よむにもたへがたきことのみ

〈郊・絵12〉

多からむ、ましてかく車にのりありく世となりては、ともすればそを引くをのが背をさへつきて、くるしき事もいでくべし、まろは低きこそよけれ、といふもをかしきに、はてはわらひぐさとなりて、手を携へつつくだりしも、へだてぬ友がきの心さへ見えていとうれし。この神、もし天狗におはしまさば、いかに見たまふらむ。

この目黒のそぞろありきは、去にし五月六日の事にてありしを、本月のはじめつきた、荒木翁のこれ見よとてあたへらる。道すがらの事を十二にわかちてゑがかれたるがいとおもしろければ、やがてそぞろなることも筆にまかせてかきくはへぬ。さるはいとはづかしきことなれど、その列のひとりなるにちなみてかくなむ。

明治二十七年六月十九日

小中村義象

「隅田の家つと」

よく遊ばざればよくつとめえずとは、何人かいひ出でけむ。ことし七月十八日、我校の職員打つて隅田河に棹さす。さるは、こよひの月を賞し、かねての労を休めて、更に大につとめむとなり。舟は二艘にして、校門をさること遠からぬ処まで来むが契り。夕さがるころ、人々皆乗らばやと行きて見れば、川岸いとけはしく、細道くねりにく

ねりて、一足だにあやまたば、水に落(ち)むさま也。暫しはおのの目も口もあきたれど、せむかたなければ、猫などの木よりおるらん時のさまして、草にとりつきつつ、尻をさきにはひくたる。駒下駄はころび安しとて、足袋のままなるあり、すあしなるあり、或は蝙蝠傘を杖にせしが、はやうつきはづして危ふげにささへたる、或は目がねおとして辛じて拾ひ得たる、或は手も足も土にまみれてなくなぐだれるなど、いとあはれなり。舟にのりうつりてぞ、人ごころつきぬるもいとをかしや。

〈隅・絵1〉

和泉橋浅草橋などくぐり、亀清楼のかどをまはれば、はやう隅田川なり。首尾の松のこかげに舟とめて、とかくさだむる事あり。さるは酒のむ人、肴くふ人、あまりものいはぬ人、よくいふ人などあれば、互に打まじらずでは興少(な)かるべしとて、幹事のおもひはかりよりいでしことぞ。

家においておもひしよりもすずしきはつきもすみだの舟出なりけり

〈隅・絵2〉

日はくれたれど筑波山かすかに見え、をちこちのとし火冷(や)かに水にうつれる、いとけしきよし。舟は打つて上りにのぼるに、はなしは涼しきかたにはあらで、豚のすむ牙山(二四)の事のみぞ多かる。かれらはまことに蛮人なり、人を虐げてもおのが腹をこやさむとするよ、などいひつつゆくに、はては弁当貰ふこと、となりのふねのものに手伸すことなどを、牙山々々といひあへるにいたれるもいとをかし。

〈隅・絵3〉

吾妻橋のもとにしばし休らふに、幹事の某は、はやう岸に上りて氷かひもてきて、解けぬまに、などそそのかさるる、いとうれし。待乳山のかねかすかに水にひびきて、うれしの森(二五)より出でくる月、

すずしきはさるものにて、げにこよひの命也けり。あれ見たまへ、その大(い)さはこのかかぐる灯よりもまされりや、とひとりがいふに、いないなまろは一丈二丈にもあまりで見ゆるものを、といふもあり、また、われは尺ばかり、おのれはかばかりと手やうしていふもあり、かかるほどに五間十間とすみのぼるに、はてはあらそひの声もたえて、あなすずし、あなこちよや、などいふもへだてぬ友がきのころもしられて、いとうれし。川のおもては銀のごとく、水わくる棹は水晶をくだくやうなるに、舟はこととひわたりにとどまりぬ。一人が、こころすみだの川つらに おもふともどち棹させば 袖ひるがへす夕風に 月ものり行くすずみぶね

〈隅・絵4〉

〈隅・絵5〉

とうたふを、やがて梅於林(二六)にかき合するに、興はいよいよそひぬ。また一人、こととひあたりふねとめて おもへばとほしみやこどり 昔男の面影も 月に浮べる墨田川

と例のうたへば例のあはするに、舟屋かたの塵もちり、空ゆく雲もただよひぬめり。更ややたけぬれば、今はかへらむ、あすのつとめこそ心にかかれ、などいひしろひて、こぎかへるに、

〈隅・絵6〉

今までさやかなりし月の、雲に見えかくれするもなかなかにめづらし。かの雲はあしでに似たり、かの雲はからじしのやう也などいふに、雲はいよいよおもしろく、あるはをどるがごとく、あるは舞ふがごとくなるは、天もこよひの遊びをもてなすにやあらむ。

もと来し川筋をかへりくるに、浅草わたりの人は、多くは左衛門がし(二七)とかいふところより上りぬ。興はつくまじけれど、家路の

いそがるるにや。

〈隅・絵7〉

こより舟を一にしてゆくに、昼のまはいとわづらはしくおぼえしところどころも、ただ灯のかげのすずしく見やらるるは、夜のふけぬる幸なりけり。

今は万世橋につきぬれば、女子高等師範学校としるしたる灯のいでむかへたる、だれもだれも我家にかへりたるこちしけんかし。そもそも我等、さかゆる御代に生れあひて、御恵の家におきふしするだにあるを、かく打つれて心ゆくばかりに遊びたるうれしさはさる事にて、またよくつとめむとの下心にぞありける。

〈隅・絵8〉

この遊をはりて数月、武村千佐子ぬしみづから筆とりてそのけしきをゑがかれ、おのれにむかひて、後のおもひ出にもせむをいかで詞書せよ、といはる。そのおもひつきのいとおもしろければ、文の拙きをもかへり見ず、やがてかきつづけしものは、そのつれのひとりなりし、こなからむらよし^{ムラ}かた、時は明治二十七年十月の一日。

付記

本稿の翻刻は氣多が、絵巻の紹介および注の作成は高槻が担当した。

注

- (一) 毎年春と秋の二回、職員が生徒を率いて郊外に遊歩する行事(『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』一九八四) 九一―九三頁。東京女子高等師範学校『東京女子高等師範学校記事 甲』(一九二二) 九八頁に、郊遊会の実施が決定された明治三十三年(一九〇〇)一月の教員総会の記事が収録されている。

- (二) 天保二年(一八三二)―大正四年(一九一五)。幕末には土佐高知藩の

絵師であった。明治維新後、洋画を学び、明治二十六年（一八九三）より女高師教授、同三年には東京美術学校（現東京芸術大学）教授となる。伝統的な題材に西洋画の写実画法を加味し、近代花鳥画の表現を開拓したとされる。以上、『日本人名大辞典』（平凡社 一九三七）一二七～一二八頁他より。

(三) 元治元年（一八六四）—大正二年（一九一三）。小中村清矩の養子。明治十九年（一八八六）、東京帝国大学古典講習科を卒業し、宮内省図書寮第一高等学校、女子高師範学校などに勤務。同三〇年に池辺姓に復姓。以上、前掲『日本人名大辞典』二〇五頁より。

(四) 家苞・家裏（いえずと）。家へ持ち帰るみやげ。

(五) 嘉永五年（一八五二）—大正四年（一九一五）。本名武村千佐子。南画と洋画を学ぶ。横浜の共立女学校を卒業後、明治九年（一八七六）に東京女子師範学校に勤務、ついで東京女子高等師範学校教授となり、同三年まで英語と絵画を指導。以上、『日本女性人名辞典』（日本図書センター 一九九三）六五三頁より。

(六) どのような場所が立ち寄り先となっているか、その場所がどう描かれているかなどが研究の一つの視点として考えられる。高槻「明治期における女子高等師範学校の遠足—お茶の水女子大学附属図書館所蔵絵巻から—」（人間文化論叢 八 二〇〇六）三三七～三四八頁では、絵巻「遠足の日」（本稿の「郊遊会図」を指す）にみられる女高師の遠足の立ち寄り先について検討した。

(七) <http://www.lib.ocha.ac.jp/tenji/oe-index.htm>（二〇〇六年五月一日現在）。

(八) 前掲注一

(九) 一四代將軍家茂夫人（和宮親子内親王）。

(一〇) 六代將軍家宣。

(一一) 仙台藩四代藩主伊達綱村の生母、三沢初子。

(一二) 近松貫四・高橋武兵衛・吉田角丸作、浄瑠璃「伽羅先代萩」の「そなたは百年待つたとて千年万年待つたとて、何の便りがあるぞいの」を指すか。引用は、『日本古典文学大系 浄瑠璃集下』（岩波書店 一九五九）三五一頁による。

(一三) 「本に報い始めに返る」（祖先の恩に報いること）。『礼記』より。

(一四) 明治二十七年七月二十九日、日清戦争における日清両陸軍の最初の本格的戦闘がおこなわれた場所（朝鮮牙山東北の成歡）。牙山の戦は、数多くの軍国美談を作り出した。『国史大辞典 第八卷』（吉川弘文館 一九八七）二〇二頁より。なお、絵巻の本文にもあるように親睦会は同年七月一日におこなわれている。

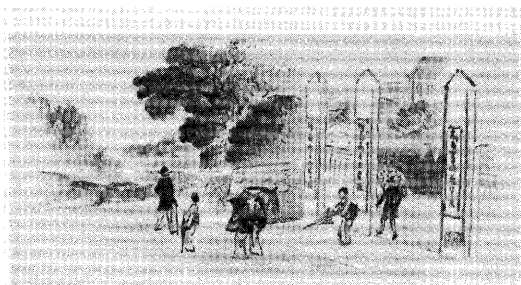
(一五) 位置については諸説あるが、由来の一つに舟で吉原に通う客が目標にしたため、見えてくると吉原に近づいて嬉しいということから、嬉の森となつたというものがある。菊地秀夫『江戸東京地名辞典』（雪華社 一九六五）三〇四頁より。また、大田南畝（蜀山人）に「日よけ舟すゝしるの木に首尾の松うれしの森やちかづきぬらん」という狂歌がある。濱田義一郎他編『大田南畝全集 第二巻』（岩波書店 一九八六）四一頁。

(一六) バイオリンか。

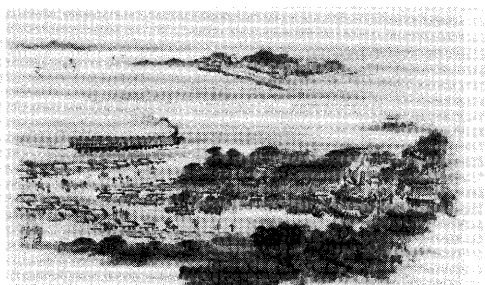
(一七) 神田川沿いの浅草橋付近。現在は、河岸があつた辺りに左衛門橋が架かっている。市古夏生・鈴木健二編『江戸切絵図集』（筑摩書房 一九九七）所収、近江屋板切絵図「浅草・鳥越・堀田原辺絵図」嘉永三年（一八五〇）。

たかつき ゆきえ (TAKATSUKI Yukie) お茶の水女子大学人間文化研究科複合領域科学専攻

けた けい (KETA Keiko) お茶の水女子大学非常勤講師



郊一絵 1



郊一絵 2



郊一絵 3



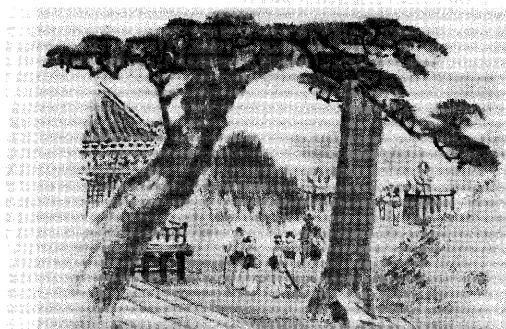
郊一絵 4



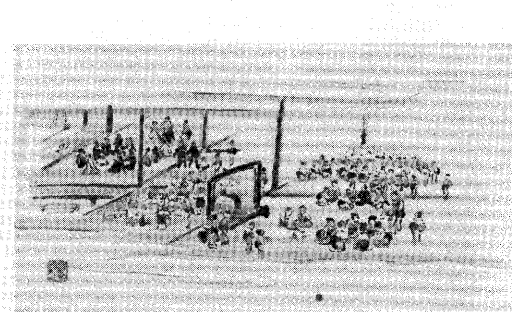
郊一絵 5



郊一絵 6



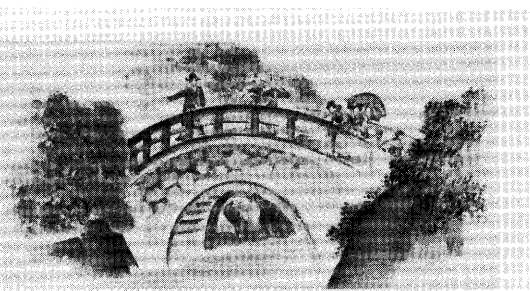
郊一絵 7



郊一絵 8



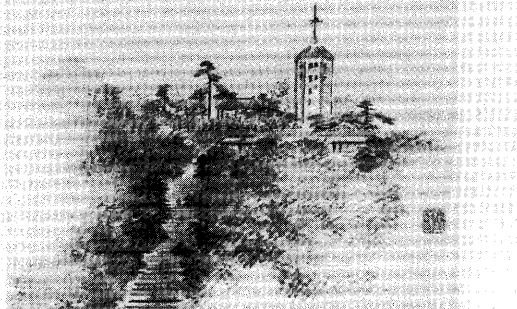
郊一絵 9



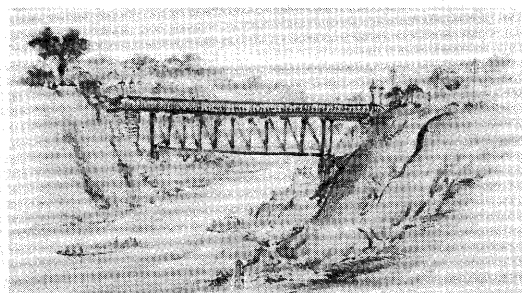
郊一絵 10



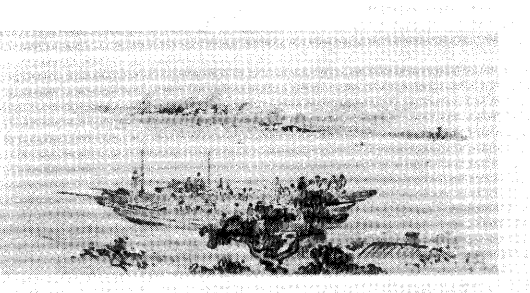
郊一絵 11



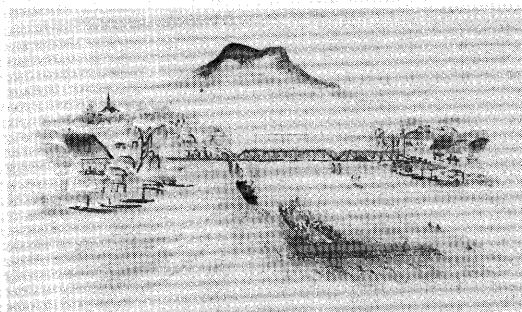
郊一絵 12



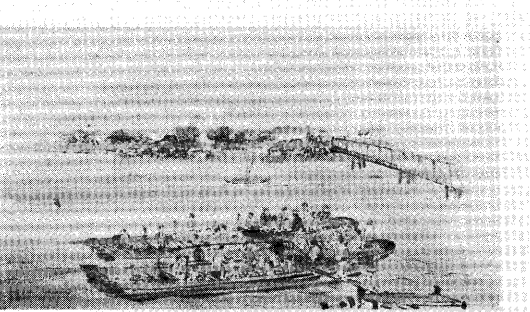
隅一絵 1



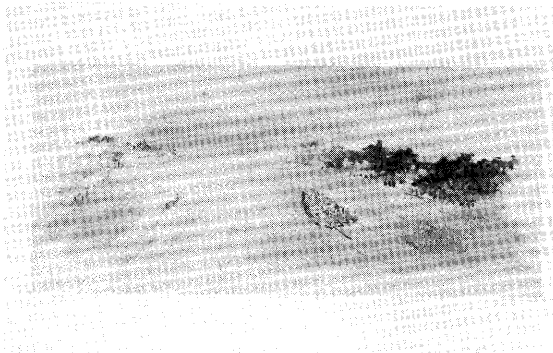
隅一絵 2



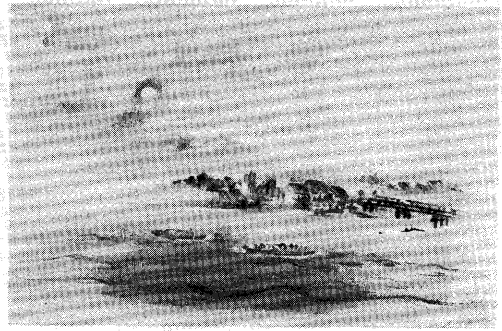
隅一絵 3



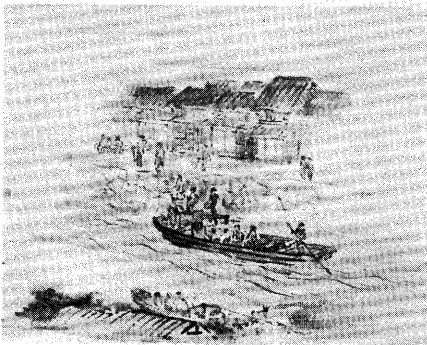
隅一絵 4



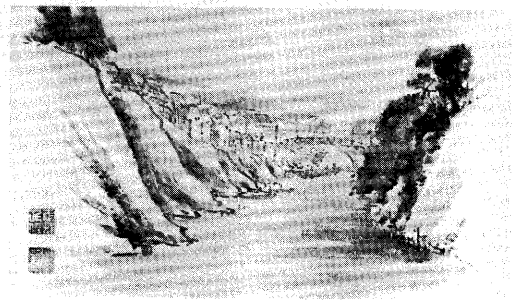
隅一絵 5



隅一絵 6



隅一絵 7



隅一絵 8